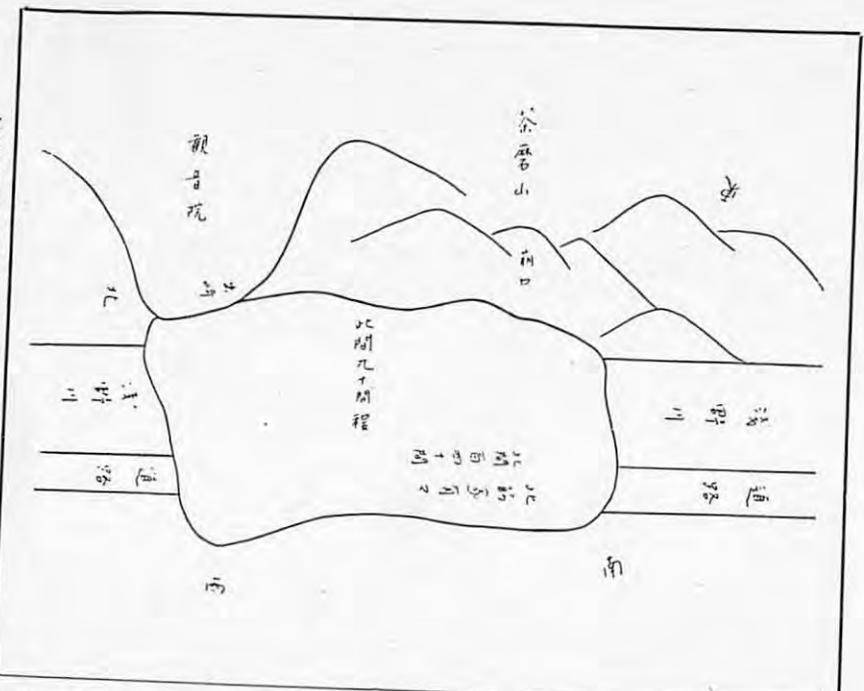


○觀音山
 卯辰山の小名なり。従前觀音院の後。地の山なるを以て、觀音山と呼べり。鳩巢文集に載せたる謙光齋記に云ふ。仰望焉。則東北之隅。高城崔嵬。複道連觀云々。而觀音之山又當其北。懸崖橫天叢樹如束。朝暉夕陰。山氣明晦。白雲往還乎其嶺。飛鳥出沒乎其間。亦足以爲奇觀矣と。按するに、觀音山・愛宕山とて共に卯辰山の小名なり。三壺記に、愛宕の別當明王院二代の住職退院の時、師匠の坊なればとて愛宕より觀音山に隱居し、則ち觀音堂を建立して此に居す。故に愛宕・觀音兩山に成りたり。往古は愛宕の山なりと云ふ。とあり。されば此の山域、そのかみ愛宕山と稱し、愛宕寺の境内なりしかど、愛宕寺の二代祐慶、愛宕寺を退院して觀音山の地に隱居し、觀音堂及び觀音院を建立せしゆゑに、それより觀音山と呼びそめたるものなりとぞ。金澤三十三所觀音順禮歌に、二十五番觀音院。名にしおふ觀音院のにはきはひはこけの衣も花のたもとも

變異記に云ふ。元祿二年七月十六日金澤卯辰觀音山崩出、淺野川之河中に山出來、長百間許幅六十間許。崩候時石火矢之如く響くと。又葛卷昌興自記に云ふ。元祿二年八月三日於江戶、金澤來狀に云ふ。先月十六日觀音山川中に崩出、俄に川中に山出來、長百間許幅六十間許有之由。山崩之時如火矢響たる由。希有之事也。見物人成群之由。とあり。また此の後の山崩の事は、改作所舊記に、元祿十二年十二月廿三日、加賀郡卯辰村領茶磨山續觀音院出崎之後山、今晝七時半時過山崩出、淺野川をつきうめ、川除町家を突出す。右町家は鐵炮屋・紺屋かどより下_キ、くわんじん橋迄拾間程大平に成。其夜より翌日まで水つかへ、下材木町・小鳥屋町迄水押來り、町人足出、崩山切抜申。とあり。その時の圖は次に出せり。

覺

一、三百六十九人 十二月廿三日之晚崩口へ罷出人足
 外拾一人 村肝煎
 一、七拾六人 同廿四日に罷出人足
 外拾七人 村肝煎



一、七拾人 同廿五日に罷出人足
 外四人 村肝煎
 一、百三拾二人 同廿七日晝八時より罷出人足
 外十四人 村肝煎
 一、二百九拾六人 同廿八日に罷出人足
 外拾二人 村肝煎
 外九百四拾三人 人足
 外五十八人 村肝煎
 右茶磨山崩所_ニ、私共與_テ下より罷出申人足書上申候。廿六日には罷出不_レ申候。以上。

元祿十二年十二月卅日 御所村 源 兵衛
 上野村 十右衛門
 淵上村 左次右衛門
 永原 權丞様
 長瀬 湊 兵衛様

右町夫人足に出したるよし、左註に記載す。變異記に云ふ。元祿十二年十二月廿三日申刻、卯辰茶臼山崩出、淺野川突埋、高十間許・幅廿間許・長百間許。壓死人三拾一人、